

# 浅井了意の常套句について

高 橋 隆 平

## はじめに

浅井了意の作品を読んでいくと、同じ話柄を近似した文章で書いている場面にでくわすことがある。了意作品にみえるこの特徴は周知のこと、従来この特徴をもつて了意執筆に疑義のある作品の検討もされてきた。近年では、この同一話柄の繰り返し部分をもって典拠探索や存疑作品の検討だけでなく、そこに見られる細かな表現方法にまで考察が進められている。本稿もそのような、同一話柄の繰り返しという特徴ともからめつつ、了意の作品中にみえるごくごく短いが特徴的な表現をいくつか取り上げて考察を加えてみたい。

もとより了意ほどの人物が様々な表現を駆使して作品を成立させているのは当然であろう。あれほどの多作を支えたのは、一つにはその多彩な表現があったであろうことは想像に難くない。もちろんそこには了意独自の工夫があったであろうが、さらには和漢にわたる古典からの引用や、仏教関係書籍から流用した表現、あるいは了意が携わっていたかと思えられる唱導にルーツをもつような表現など、様々な要素が考えられる。それらを一つ一つ紐解いていく作業は連綿として続けられているが、了意に関しては漢籍の引用に関する研究にいささか偏りがあつた感はいなめな

い。

本稿でも、漢籍の引用つまり典拠問題とはもちろん無縁ではない。しかし、典拠探索に一旦区切りがつけば、そこに新たに加えられた了意独自の工夫を考察する必要は当然ながら出てくる。そして、本稿で報告する常套句が、その了意独自の工夫の一つではなかったかと思われる。

### 一、飽くまで食らひ暖かに着て

了意の、短いが特徴的で目に付く表現とは、例えば了意の代表作『伽婢子』でいうと、次のようなものが挙げられよう。

浅原又とふていはく、「これは人間にありし時、尼となり、法師となりて、田つくらずして飽までくらひ、織をらずして暖に着て、かたちは出家ながら戒律をまもらず、心に慈悲なく学道なくして、いたづらに施物をくらひけるもの共也。此故に畜生となりて信施をつくなふ」

（巻四の一「地獄を見て蘇」）

傍線部で示した部分のうち、特に「飽までくらひ」と「暖に着て」がここで取り上げたい表現である。このような表現は『伽婢子』中では他に

人死すれば魂は陽に帰り魄は陰にかへる。形ちは土となり、何か残るものなし。美食に飽、小袖着て、妻子をゆたかに、樂をきはむるは、仏よ。飢食をだに腹にあかず、麻衣一重だに肩を裾に、妻子を沽却し、辛苦するは餓鬼道よ。

（巻三の二「鬼谷に落ちて鬼となる」）

や

又みづから解していはく、「(略) 教因は僧戸封祿ありて安海は綱位にいたらざりし、これ智と愚との故ならず。沙弥はあた、かに衣て飽までくらひ、主恩は飢寒にせまりぬ。これ才能の不敏なるによらんや。これすでに過去世の因縁なり。儒には天命といふ。」

(卷十の六「了山貧窮付天狗道」)

などとみえて、了意が度々使用していることがうかがえる。ところが、この表現は和田恭幸氏が指摘されているように典拠のある表現であり、もともとは仏教批判の常套句として使用されていたものであった<sup>(1)</sup>。確かに『伽婢子』の該当箇所を見ると点線部で示したように、ここに挙げた三例は全て僧侶批判の文脈中で使われていることが確認できる。同じような表現が了意作の仏書でもみることができ、挙げるのは『勸進義談抄』中・第一「三教共有因果事」の一節。

タトヘバ法師トナリテ。三衣ヲ身ニマトヒ。檀越ノ信施アクマデニシテ。アタ、カニ着ユルヤカニ食シ。人ヲ化スルノ智恵モ  
ナク徳ウスク。行跡ト、ノホラザランモノハ。死シテ牛馬ノタグヒトナリ。檀越ノ信施ラツクストカヤ。

みると、傍線部に類似表現がみられ、ここでも僧侶批判の文脈中で使われていることが確認できる。さらには、二重線で示した「タトヘバ……トカヤ」という記述によつて、この箇所が他からの引用であり、了意独自の表現ではないということが明確にわかるのである。このように「飽くまで食らひ暖かに着て」の類似表現は了意独自の作文ではなく、仏教批判の文章等からの引用ということになる。もちろん、仮名字子である『伽婢子』の文章においては、引用

とは分からないように作品中にうまく落とし込まれたものになってはいる。しかし、これを了意が独自に付け足した常套句かどうかを考えると、これらはあくまで仏・僧批判の常套句の引用箇所であり、了意独自の常套句とするのは難しいだろう。

ところが、一方で次のような表現も見られる。挙げるのは、『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」において、武田信玄の重臣原加賀守昌俊が息子隼人佐に訓戒を垂れる場面である。

鳥獸・傍虫の類まで、をのれくひとつの得手あり。一芸なきものはこれなし。いはんや人とむまれ、こと更待たらむものは、弓矢の事につけてはひとつの得手をよく鍛煉して、これをもつて主君の所用にたて御恩をほうじたてまつるべし。いたづらに俸禄をたまはり、飽まで食ひ、あたゝたかに着て、邪欲をかまへ、義理をしらず、一芸一能もなきものは、ちくしやうにもをとりて、これは天地の間の大盗賊なり。

傍線部に、先程と同様の表現が見られる。しかしながら、ここは父親が息子に訓戒を垂れる場面であつて、僧侶批判や仏教批判の文脈ではない。つまり、ここには「飽くまで食らひ暖かに着て」の類似表現が仏教批判・僧侶批判以外の場合でも使用されているのである。このような例は『伽婢子』のこの箇所だけではなく、他の了意作品でも確認することができる。例えば『可笑記評判』巻七の二「子を生立る心得の事」の評部分においても

師につけて、学さするに、その師、をしへの、ゆるやかなるハ、師匠のあやまち也、親をしへ、師きびしきに、学する事の、はかのゆかぬハ、これ、その子が罪に、あらずや、身にあたゝかに着て、口に飽までくらひ。あたら、光陰をむうなく送り、鵜鷹、川狩、博奕、酒色に心をうつし、一期のあひだ、文盲無事に、田夫のいやしき有様にて、打碁しなば、まことに、人と生れたる甲斐やなからん、せめて、物の理非、うすあかりほども、わきまへて、及バぬまでも、道に心ざしあらば、めで

たき人倫のたぐひ、ならんかし

というように、僧侶に限らず一般的な怠慢を戒める表現として用いられている。また、先にも挙げた了意の仏書『勸進義談抄』にも、

昼夜ニオモフトコロハ忠孝ノミチナルベシ。君ニ忠アリ親ニ孝アレバ。人イマダシルコトナケレトモ天マヅコレヲシリ。神カナラズコレヲアハレム。ソノ身富貴ノ果報ニホコリテ。飽マデクラヒアタ、カニ衣テ。ミツカラヲゴリ人ヲアナドル。ソノ身一生ハヤスシトイフトモ。子孫ノタメニイカナラン。

（上・第七「脩身齊家之事」）

とあり、忠孝を奨励する場面で、この表現が使用されていることが確認できる。そして、同じ『勸進義談抄』でも、先程の例とは違い、ここでは本文の中に紛れ込んでおり、当然ながら「…トカヤ」などといった引用を明示する特徴はなくなっているのである。こうなってくると、仏教批判・僧侶批判の常套句として使用されていたものの引用というものはまた別の使われ方がされるようになってきたと言わざるを得ない。確かにもとは仏教批判・僧侶批判の常套句だったものの引用であつたろう。しかし、そういった仏・僧批判といったもとの意味から離れて、違った場面での使用に転用されていっていることが確認できる。

二、「一芸一能も無し（無芸無能）」「これ天地の間の盗賊ならずや」

さて、了意が好んで使用していた表現はこれだけではない。実は先に挙げた『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」

の本文中の中に、「飽くまで食らひ暖かに着て」以外にも特徴的な表現が見られる。煩雑ながらも一度その文章を、さらに少し長めに挙げてみる

鳥獸・傍虫の類まで、をのれ／＼ひとつの得手あり。一芸なきものはこれなし。いはんや人とむまれ、こと更侍たらむものは、弓矢の事につけてはひとつの得手をよく鍛錬（火ヘンになつて）して、これをもつて主君の所用にたて御恩をほうじたてまつるべし。いたづらに俸祿をたまはり、飽まで食ひ、あたゝかに着て、邪欲をかまへ、義理をしらず、一芸一能もなきものは、ちくしやうにもをとりにて、これは天地の間の大盗賊なり。日月・雲霧・草木まで、をのくみなその益あり。無芸無能にして人のため益なく、かへつて害になるものあり。かまへてよく心得よ

〔伽婢子〕卷五の四「原隼人佐鬼胎」

点線部が、「飽くまで食らひ暖かに着て」の類似表現であることは先程確認済みだが、その他に二箇所の特線を引いた。ひとつは「一芸一能も無し」という表現。これは、本文の後半にある「無芸無能」でもよい。その類似表現ということである。もう一つが「これ天地の間の大盗賊ならずや」という表現である。これらの類似表現が他の了意作品でもみられるので確認しておきたい。

次に挙げるのは「これ天地の間の大盗賊ならずや」の類似表現。早いところでは『堪忍記』に二例ほどみえる。

かゝるたうとき上人の。御科も、おはせぬを。是非なく打奉るものハ。これ大悪人ならずや。

（卷一の四「三空也上人忍辱の行の事」）

しかれば。君に、つかうまつるにハ。只常に忠節を思ふべし。それに又、品あり。

主のおためと申て。その主の耻に及ぶをも、しらず。悪事あれ共、いさめず。我身をかばひて。欲ふかく。よき主君を、あし

く。仕なすハ。これ国中の大賊なり。

又、内心ハさもなく。知行を、おほく給ハらんとて。忠節がましきも。まことの忠にハ、あらざる也。

(卷二の十一「主君につかふまつる堪忍」)

卷一の例は空也上人が六波羅で理由もなく若者に乱暴されたが全く腹が立たなかつたと述べた後の記述。卷二の例は題にあるように主君に仕える際の要領を述べる中で使用されている。

ただ、これらのように単独で使用される場合は、類似表現であると殊更に取り上げてみたところで、その表現があまりも短いために考察対象に入れるのは難しいかもしれない。むしろ、本稿で取り上げたいのは、ここであげた「一芸一能も無し(無芸無能)」「これ天地の間の大盗賊ならずや」という表現がセットで用いられている場合である。つまり『一芸一能も無し』いものは「これ天地の間の大盗賊ならずや」となっている箇所である。『狗張子』卷二の四「原隼人佐謫仙」の一節を挙げる。

ある時、信玄仰せけるは、(略)主君の御蔭にて、命をつなぎ妻子をはぐくみ、心安く身をたてながら、その家の法をそむき、御恩を報ずるところざしを忘れ、わたくしの遺恨をもつて身命を打ち果すは、主君の御用にもたたず、ただ国家の盗人ならずや。かかる不覚人は、生まれてあれども義理をしらず、恥をも知らぬゆえに、大事の虎口を逃げくずして、味方の負をさするものなり。先祖親祖父はたといよしとて、子孫かならずよかるべきにはあらず、自分の行跡よき働きなくば、世に名は聞ゆべからず。隼人佐は、父には殊のほか勝れてみゆ。とに角心を正直に、家を治め百姓をあわれみ、忠節をむねとすべし。とぞ、の給ひける。

然るに隼人佐は、武勇才智遠慮分別首尾さうおうのもの、ふ也。こと更に自門他家に比類なき一能あり。父はもと甲斐国高畠といふ所の人なり。武篇に名たかく、方向の陣どりを得ものにて、楽のたうといふ事を仕いだし、たひく勝利をあらはせ

り。子息隼人佐にむかひ、それ侍は、何にても弓やの道にひとつの得ものあるやうにつとめてたしなむべし、といひおきけり。

武田信玄が原隼人佐に訓戒を述べ、さらにその後で父の加賀守が諭す箇所だが、ここは先に挙げた『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」と同じ原隼人佐を扱った一話である。その内容は『伽婢子』のものと似通っている。つまり、ここは冒頭で述べた同一話柄の繰り返し箇所だと言える。当然その表現も近似したものになっており、傍線部に示したように類似表現もそのまま引き継がれることになる。傍線部二箇所目の「比類なき一能あり。」という表現も、隼人佐がそうだとすることで逆説的に「一芸一能も無」い者とはなるなど、同内容を述べていることは了解できよう。その他には『本朝女鑑』にもこのセットが見られる。

をよそ人の妻とならん者、紡績織縫の道を知らずば、夫の肌をかくす事かなふべからず。をよそ天地の間に身を置くもの、とりけだもの、はふ虫の類にいたるまで、をのれゝの職分、いづれかその能なきものあるや、まして人たる者、つとむべき芸能、それゝの道をつとめずば、たゞこれ天地の間の盜賊ならずや。このゆへに女はよく女の道をつとめ、その能をたしなむべき也。

(卷十一女式上「女工を教ふべき式」)

女性が身に付けておくべき裁縫等の家事について述べられている箇所であるが、例の二つの表現がセットで使われていることが確認できる。しかも、その主旨は『一芸一能もな』いものは、「これ天地の間の大盜賊ならずや」というものである点でも共通しているだけでなく、さらに『伽婢子』と『本朝女鑑』では『生きとし生けるもの、昆虫に至るまで全て何らかの芸能を身に付けているものだ。まして、人間ならば当然身に付けておかななくてはならないもので、「一芸一能も無」いものは、「これ天地の間の大盜賊ならずや』という、このセットに行き着くまでの論法でも



ところで、実は、この『本朝女鑑』は北条秀雄氏が真偽未決の部類に入れられた作品である<sup>(2)</sup>。これまでも、やはり同じ話柄を扱っており、しかも近似した文章で書かれていることから了意作であろうとの指摘がされていた<sup>(3)</sup>。それに加え、このように決して長い文章等ではなく短い記述であるが、了意が常套句として好んで使っている表現が使用されているということからも『本朝女鑑』が了意作品であることを指摘することができると思われる。

「芸一能も無し」「天地の間の大盗賊ならずや」

漢ノ馬美、嘗テ曰、幸ヒニ盛名ノ世ニ生レテ、免カレ、身ヲノ數ニ託シ、名ヲ千載ニ建ベシ、空シク生テ、徒クミラフナリ。  
為テ、天地間ヲ穢ベカラズ、ト云ヘリ、マコメタキニ  
ヒ、百工ノ作ル器ヲ、吾レ、得テ用ヒ、政理苦勞ノ國土ニ住テ、天地國守ノ恩德ヲモ思ハス、暖カニ被テ、飽マテ食ヒ、無芸無能ニシテ日月ヲ過シ、世ノ便リ、人ノ力ヲトモ為ス、何ノ做得タル事モ無シ、徒生、徒死シテ果ナシ、即是レ、天地ノ間タトガツ  
ノ轟聲ニ非スヤ、彼モ一時、此モ一時ト云フト雖トモ、草木ト共ニ朽テ、聞コト無ト、名ヲ千載ニ貽シテ、人ノ鑑ト為トハ、  
孰哉矣

『新語園』は中国故事説話を訓読調に翻訳したものである。この一話も管見では『太平御覧』巻四〇七に典拠を求めることができるようだ。

謝承後漢書曰、(略)又曰、馬実字伯騫(略)幸ニ俱ニ盛明ノ世ニ生き、塶瓦ノ姿ヲ免レ、丈夫ト為ルニ託シ、当に名ヲ後載ニ建ツベシ。空生徒死ノ物ト為リテ天壤ノ間ヲ穢スベカラズ。

『太平御覧』巻四〇七・人事部四八・交友三

『太平御覧』の該当箇所と比べてみると『新語園』冒頭の「漢ノ馬実…」から「…ト云ヘリ」までしか依拠していないことがわかる。従つて、続く「寔トニ…」以降は了意独自の作文ということになるのであるが、そこに見えるのが、傍線部で示した通り、あのセツトなのである。その論法も畜生・昆虫などの表記はないものの、『一芸一能も無』いものは、「これ天地の間の大盗賊ならずや」という点で今までのものと共通している。さらにこの記述には点線で示したごとく、「飽くまで食らひ暖かに着て」も加わっている。つまり『飽くまで食らひ暖かに着て』、「無芸無能」のものは「これ天地の間の大盗賊ならずや」というものである。この、「飽くまで食らひ暖かに着て」「一芸一能も無し」「これ天地の間の大盗賊ならずや」という三つの表現が揃っているという点は、『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」も同じである。このように『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」と、この『新語園』巻之四の四十三「馬実志氣」は了意の常套句が色濃く反映されている一話と言えるだろう。

この『新語園』の一話が他の用例と違う点は、『新語園』が中国故事説話集であることである。どうということかとというと、翻訳であつて翻案などではないので作者の新たな作文は基本的には必要としないものはずなのである。既に指摘されているように一部、誇張した表現などの文飾や、一話をまとめるための教訓的文言等が最後に付されるこ

とはままある<sup>(4)</sup>。しかし、この巻之四の四十三ではその大半が了意の作文となつていたのであり、その長さは群を抜いている。単に一話をまとめるために最後に付した教訓的文言としてはかなり長文と言えるだろう。そして、その長文の中心をなしているのが、三点セットの常套句なのである。ここに、了意がこの表現を常套句として好んで使用していたことがうかがえるだろう。

#### 四、おわりに

さて、「飽くまで食らひ暖かに着て」は、もともと仏教・僧侶批判の文脈中で使用されていた表現だった。了意もちろん最初はその引用としてこの表現を用いただろう。しかし、それはつまり、かなり使用場面を制限されていたということにもなる。七・七調でリズムが良く、内容から何かしらの怠慢を批判する時には用いることができるこの表現は、了意ならずとも大いに利用したいと感じるものだろう。そして、了意はこの表現を自身の作品の中で仏・僧批判の表現から転用していくこととなる。そうなった時、この表現は仏・僧批判の常套句という呪縛から解き放たれ、様々な場面での使用が可能になった。しかし、了意は何も無節操に使っていたわけではなかったようである。「一芸一能も無し」や「これ天地の間の大盗賊ならずや」といった表現と共に怠慢を諷めるための常套句として利用していたのである。常套句とはいえ、見飽きるほどの頻度で使われたわけでもなさそうだ。多作で知られる了意だが、本稿で指摘できた常套句が使用されているのは『伽婢子』『狗張子』『本朝女鑑』『新語園』の四例だけである。常套句よりも決め台詞とした方が良いかもしれない。

いずれにしろ、了意が気に入って使っていた表現の一つと言えるわけだが、注目すべきはその表現にブレがなく、

しかも長期間使用され続けていることであろう。一連の常套句を年代順に整理すると、まず寛文元年（一六六一）刊行の『本朝女鑑』巻十一で使用する。「飽くまで食らひ暖かに着て」という表現こそないが、その形は既に完成していると言えるだろう。その常套句は寛文六年刊行の『伽婢子』巻五の四において、三点セットの『飽くまで食らひ暖かに着て』『一芸一能も無』いものは、『これ天地の間の大盗賊ならずや』という表現で使われた。その後は同じ話柄を扱った了意最晩年の作品、元禄三年（一六九〇）の序がある『狗張子』巻二の四で再利用される。その一方で天和二年（一六八二）刊行の『新語園』巻之四の四十三でも『伽婢子』と同じく三点セットを用いているのである。つまり、最初の『本朝女鑑』が刊行された寛文元年から最後の『狗張子』までは実に約二十年の隔たりがあるのであるが、それにもかかわらず了意を誡める一節の中にこの表現を用い続けている。しかも、その常套句は『本朝女鑑』当時から完成度が高く、以降の使用例でもブレがない。もちろん、仮名草子と啓蒙教訓が切り離せない関係である以上、了意を誡める常套句が使われ続けても、さして驚くことではないのかもしれない。とはいえ、使われ続けたといっても継続的と言えるようなものではなく、『伽婢子』から次の使用が認められた『新語園』の間は十二年間もの開きがあるのである。

ここに、了意の唱導活動の一端を推測することには無理があるだろうか。了意は、その晩年には実際に唱導活動をしていた記録が残っている。いつ頃から唱導活動をおこなっていたかは想像するよりほかにないが、作家としての活動と唱導活動が並行して行われていたとするならば、このような常套句を実際の唱導の場でまさしく常套句として継続的に用いており、それを自身の作品中に取り込んでいった。この常套句の使われ方を見ていくとそのような推測がなされてしまうのである。本稿では、もともと仏教・僧侶批判の表現であったものを転用し、さらに他の表現と組み合わせることによって了意独自の常套句とした表現があることを指摘した。

註(1)

和田恭幸「浅井了意の仮名草子における古典の引用」(『国文学解釈と鑑賞』第七五巻八号 至文堂 二〇一〇年八月)。韓愈の廃仏論の中で使われているものが代表的だが、日本では『儒仏合論』巻九「退之大顛之間和」において「徒ニ耕サズシテ食シ、蠶セズシテ衣ル、以テ先王之道ヲ残賊ス。」と紹介されている。また仏教批判ではないが『明心宝鑑』巻上・存心第七においても「景行録云、夙ニ興キ夜ニ寝テ忠孝ヲ思所ノ者ハ人知ラズレトモ天必ス之ヲ知ル。飽マテ食ヒ煖カニ衣テ恰然トシテ自ラ衛ル者ハ身安シト雖其レ子孫ヲ如何セン。」といった表現も見られる。

(2) 北条秀雄『新修浅井了意』(笠間書院 一九七四年九月一日)

(3) 青山忠一「本朝女鑑」(『仮名草子女訓文芸の研究』桜楓社一九八二年二月)、濱田啓介「刊行のための虚構の発生—本朝女鑑の虚構」(『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会 一九九三年十二月)、江本裕「浅井了意—了意の感慨と存疑作序説」(『国文学解釈と鑑賞』第六六巻九号二〇一一年九月)等。

(4) 花田富二夫「『新語園』と類書」(『仮名草子研究—説話とその周辺—』新典社 二〇〇三年九月) など

使用テキスト

- ・『伽婢子』(『新日本古典文学大系』岩波書店 松田修・渡辺守邦・花田富二夫校注 二〇〇一年九月)
- ・『新語園』(『仮名草子集成』第四十・四十一巻 東京堂出版 二〇〇六年九月三〇日、二〇〇七年二月二八日)
- ・『本朝女鑑』(『近世文学資料類従 仮名草子編』(6)・(7) 勉誠社 一九七二年十一月十五日、三〇日)
- ・『太平御覧』(中華所局 一九六〇年二月) 原漢文
- ・『可笑記評判』(『仮名草子集成』第十五巻 東京堂出版 朝倉治彦・深沢秋男編 一九九四年二月一〇日)
- ・『勸進義談抄』(『浅井了意全集』仏書編第一巻 岩田書院 二〇〇八年九月)
- ・『狗張子』(『仮名草子集成』第四巻 東京堂出版 朝倉治彦編 一九八三年一月二二日)

(たかはし りゅうへい・関西学院大学大学院文学研究科研究員)